

筑紫（九州）の萬葉集と風景画シリーズ（第三十八回）

おほやけめ うた

## 「大宅女の歌」

ゆうやみ

1) 夕闇は 道たづたづし

月待ちて いませ我が

せこ ま

背子 その間にも見む

卷四—709

（解説）夕闇は道がたしかではありません。月の出を待ってお帰り下さ

いわが夫よ、その間だけでもあなたのお顔を見ていとう御座います。

くもがく ゆくへ な

2) 雲隠り 行方を無みと

わ

我が恋ふる 月をや

ほ

君が 見まく欲りする

(解説) 雲に隠れ、行くえが知れなくてわたしが恋しく思う月をあなたは見たいとおっしゃるのですか。

・前記万葉歌二首の作者については同じような題詞が前記されている。

・前出歌(1) 卷四―709の歌は「豊前国の娘子とよくにのみちのくち 大宅女おとめ おほやけめの

歌一首、未だ姓氏を審らかにせず」と記され、

・後歌(2) 卷六―984の歌は「豊前国の娘子の月の歌一首、娘子あざな、字を大宅おほやけといふ。姓氏未だ詳らかならず」と記されている。

・二首の作者「大宅女」については「国名を冠する遊女らしい」という説が一般的なようであるが、佐々木均太郎著「二豊路・万葉を訪ねて」には卷四―709の作者・大宅女は九州にある宇佐神宮・

祝部はふりべ・大神宅女おほがのやけめに比定されるとの説を述べる。

・「祝部」は古来、神社の神職の名称の一つである。

・大分歴史事典には八幡神の活動で最もめざしいかったのは、東大寺

大仏をめぐる第四十五代天皇・聖武天皇しやうむ(724〜749年在位)

への協力の時であったとある。天平十九(747)年に宇佐八幡宮に

聖武天皇は自分の意思を伝達するため特使を派遣し奈良東大寺に大

仏造立をすることをお祈りした。それに対して八幡神は天皇の御願い

を助け奉ると協力を申し出た。

・このようなことから天皇は八幡大神の「祝はふり大神宅女（おほがのやかめ）」・同杜女もりめの兩名に外従五位上を授け・・・とあり、その功績に対して位を授与している。

・佐々木均太郎氏はここに名が記される「宇佐神宮の祝・大神宅女」が宇佐神の歴史あるいは歌の内容や品格から推測するとこの歌二首の作者「大宅女」ではないかと記述する。

・宇佐神宮は八世紀の半ばには奈良東大寺の大仏建立に関与し、大仏鑄造の際に宇佐八幡と関係の深い豊前香春岳の採銅も用いられるとともに製銅技術者が宇佐や採銅所であった香春（福岡県香春）あたりから一団となって奈良に向ったと伝えられている。このようなことから国家神の第一歩を踏み出したと伝えられる。

・宇佐神宮は、大分県の北東部、東側を伊予灘、瀬戸内海、北側を周防灘に囲まれている国東半島の付け根、宇佐市にある。

・宇佐神宮は神龜二（725）年に現在の地に造立され、八幡神をお祀りされた。これが本宮の創建である。別名「宇佐八幡」とも呼ばれる。その呼び名が指すとおり「八幡宮」と呼ばれる神社は現在、全国に約4万社余りあるといわれるが宇佐神宮はその総本宮である。

・宇佐神宮の境内は実に広大である。その神域はおよそ56万平方メートルもあり、三つの本殿をはじめ、頓宮、奥宮、外宮、若宮、東宮など、すべてをじっくりみて歩くには、一日かけても足りないほどだ。

(参考文献) 佐々木均太郎著「三豊路・万葉をたずねて」「宇佐神宮由緒」「大分歴史事典」など

(写生地) この歌の作者と推測される巫女大神宅女が祝部であった宇佐神宮を象徴する建造物で大分県有形文化財に指定されている(大分県宇佐市南宇佐)の南中楼門(皇族等が通る門)などを描く。

(池田杏花)



・宇佐神宮位置図

「宇佐神宮」へ訪れる際の公共交通機関の一つとして九州の入口に位置する北九州市小倉から九州の代表的温泉地である別府温泉を経由し鹿児島へ向かう路線であるＪＲ日豊線「宇佐駅」で下車し、バス等で国道１０号線を約４キロメートル北へいくと宇佐神宮へ至る。

